



谷根千地域から これ以上銭湯を 失わないために



2011/03/13 撮影／山田しげる

【企画】 休業中の根津・山の湯に入ろう！

～煙突もカランもお湯もないけれど、これを最後にしないための見学会～

2011年5月4日(水曜日)午後2時～6時

主 催／谷根千からこれ以上銭湯を失いたくない風呂好き連中＝略して「銭風連」

協力／山の湯、谷根千ウロウロ <http://yanesen-urouro.bakyung.com/>、古道具・古本 不思議、貸しはらっぱ 音地、川嶋信子、三遊亭円左衛門、ユミソン、宮田泰子、川本真理 (イラスト)、ほか 根津のみなさん

地域雑誌「谷中根津千駄木」号外 — ①

発行／谷根千工房 2011年5月4日
<http://www.yanesen.net>

東京都文京区千駄木3-1-1 団子坂マンション内

tel&fax 03-3822-7623 E-mail:kobo@yanesen.com

協力／スマイル企画



【山の湯被災】

3月11日の東日本大震災は文京区・台東区で震度5弱を記録し、いまは暗渠となる旧藍染側沿いの根津・谷中・池之端・千駄木（目視で影響のあった場所を多い順に並べる）の町も被災した。なかでも根津では、内壁・屋根の崩落、建物の傾き、屋根瓦の落下、ブロック塀の倒壊など、谷根千地域のなかでは最多の被害があった。

根津神社表参道に続く道沿いの銭湯「山の湯」（文京区根津1-22-17）は、煙突の途中に穴があき、傾いてしまった。煙突のまわりは鉄骨で補強されており、すぐさま倒壊の危険はないものの、コンクリートの欠片の落下、^{カマ}罐の損傷が心配された。

店頭には「浴場建物の一部及び営業設備の破損により当分の間、休業します」という張り紙が掲示されたが、山の湯からは「このままでは存続は困難」と伝えられている。

【谷根千の銭湯状況】

四半世紀をさかのぼると、谷根千界限には徒歩圏内に、浜田湯・人参湯・宝湯・真島湯・梅の湯・大菊の湯・菊の湯・柏湯・宮の湯・世界湯・初音湯……さらにいえば赤津湯・善光寺湯・協和湯という銭湯もあった。名前を聞いて懐かしく思い出す方もあるだろう。

現在では、谷中に朝日湯、池之端に六龍鉱泉、千駄木に鶴の湯・富久の湯だけとなり、がんばって歩いて西日暮里の富来浴場、千歳湯（離れすぎか）だけである。

仮に山の湯が廃業すると、根津の公衆浴場はゼロになる。ゼロ、恐ろしい数字だ。

【山の湯とは】

残念ながら山の湯の創業年はわかっていない（この機会にご存知の方があればぜひ教えて欲しい）。

建物は正期、震災前と聞いている。切妻屋根の建物で、黒瓦の屋根は今回の揺れにも乱れはない。入口部分にモルタルの下足場所が増築されている。そして暖簾、その上の摺りガラスに「男湯」「女湯」の文字。

番台を通り脱衣所は、漆喰で塗られた折上げ天井から3枚羽の扇風機が下がっている。木製の赤ちゃん台、重そうな旧式の体重計、道路側の窓ガラスには雲形の意匠が。背景画は丸山清人氏。今年は2年に1度の描き替えの年だった。

そして山の湯といえば、マキの木桶。谷根千界限で木の桶を置く銭湯はもうここ以外にはない。



【今井由紀夫さんの話】

山の湯主人、今井さんは昭和39年生まれ。銭湯の担い手では若手である。今回の被災がなければ（実は被災した今でも）、風呂屋を続けたいと考えている。「木桶は死んだ親父（今井勇孝）のこだわりでした。柔らかな感触と音が

いい。湿度を保ちながら手入れをするのが長持ちの秘訣です。

営業を西村さんからうちが引き継いだのは、昭和43年（1968）でした。親父は石川県の能登部の農家の倅で、お袋は七尾。親父のおじさんがやっていた江東区大島の銭湯に小僧に入り、昭和30年に結婚して神奈川の平塚の銭湯、それから根津とずっと風呂屋です。ここの大家はぼくの叔父さん（親父の弟）で、江東区の久の湯と同じ経営です」

西村のおばあちゃん→その息子さん夫婦→今井勇孝さん→由紀夫さん。と、4代さかのぼることができたが、さてこの前もあるのだろうか。西村さんの時代には、ライオンが飼われ、ライオンの背にサルを乗せて散歩をしていたという驚きの話も近所で聞いた。



【煙突撤去、建物とは……】

今回、山の湯では煙突の撤去を最優先に考えた。これは、近隣への配慮と文京区からの強い要請による。足場を組んで煙突内の清浄、重機を使つての解体と撤去。業者の見積もりを取るひまもなく、急を要する工事は、通常以上の膨大な費用を必要とした。銭湯の厳しい経営状況では、この撤去費用を負担し、なおかつ再開に向けた改修をすることは不可能という判断が大家さんにあり、建物も解体して更地へ、のスケジュールが目前に迫っている。

被災後に建築士の藤井さん、建設設備士の金子さんに山の湯の現況を見てもらった。「今回の地震で建物がおよそ0.7～0.8度北西方向に傾いたと思われますが、基礎に大きなひび割れや沈下、扉類の開閉、柱などに大きな損傷は見受けられません。煙突と罐の損傷は致命的で、再開には設備の更新が必要でしょう。建物は大規模改修か建替になるのが普通でしょうが、根津の地域に息づく建物として、大正期からの銭湯の原型を生かした改修を行いたいものです」（藤井氏の話）

【銭湯文化の継承、地域コミュニティ、そして防災】

銭湯は風呂に入る、というだけではない。…それは文化を伝え、コミュニティーの役割を果たし、“公衆”の楽しさ面倒臭さを体感する場である。たとえば大手シンクタンクは、銭湯を配置したコミュニティ作りを新しい町のあり方として提言している。

現在、文京区では寿会館から、台東区では谷中コミュニティセンターから、浴場の機能をなくしてしまった。この町が被災したとき、自衛隊による巡回の風呂を待つだけになってしまうのは、なんとも心もとない。

銭湯雑誌「1010」の口絵を飾った谷中貸しはらっぱ音地の牧住款子さんは、「銭湯に行くと、たいていの悩みは解消するの」と言う。そう、珈琲一杯の値段で、からだほかほか温まり、お肌から心のケアまでお任せできてしまうのだ。



【さあ、どうする】

通常、銭湯を新規に作るとその規模、設備によるが億単位の費用がかかる。現在、新築で銭湯を立てる場合（営業許可を持っていることが大事だが）、東京都からの補助金が7500万円、文京区からの助成金が1000万円あるという。中普請のみ直す場合は都から2000万円、区から400万円である。

23区を見渡してみると、たとえば港区では、東京都と同額の補助があるといい、港区、千代田区では区立銭湯もすでにできている。また足立区では自治体独自で銭湯雑誌を発行して宣伝し、入浴サービスも数々ある。新興住宅地では、銭湯を地域コミュニティの拠点と位置づけた町づくりも見られるようになった。

山の湯の再開は、山の湯だけの問題ではない。銭湯を次世代にどう引き継ぐかのモデルケースにできないか。

そこで、【要望書への署名】【文京区の銭湯政策への励まし】【今後の銭湯のあり方】……など、谷根千地域からこれ以上銭湯を失わないための方策・知恵を求めます。（Y）



山の湯の今井さん一家。右が先代の今井孝孝さん。（昭和43年頃）